

J T O s 活動報告

日本陸上競技連盟 競技運営委員会
幹事・J T O 杉本太郎

2025年度は第1期から第7期まで総勢55名体制で、日本陸連主催・共催競技会を中心に、全国各地で行われた競技会の運用支援にあたってまいりました。

1 2025年度派遣競技会の状況

(2024年度全国会議以降)

- ・日本選手権20km競歩 ・日本選手権クロスカントリー ・東京マラソン
- ・名古屋ウィメンズマラソン ・全日本・日本学生20km競歩
- (2025年度) 4月1日~2025年1月25日まで
- ・金栗記念選抜中長距離/日本選手権10000m ・吉岡隆徳記念出雲陸上
- ・長野マラソン ・兵庫リレーカーニバル ・織田記念 ・静岡国際 ・木南道孝記念
- ・ゴールデンゲームス in のべおか ・水戸招待陸上 ・布勢スプリント
- ・SEIKO ゴールデングランプリ陸上2025 東京 ・田島直人記念陸上
- ・日本陸上競技選手権 ・日本陸上競技選手権混成/リレー ・北海道マラソン
- ・MIDDLE DISTANCE CIRCUIT 2025 ・全国高等学校陸上競技選手権
- ・2025 オールナイト陸上(実業団・学生対抗) ・富士北麓ワールドトライアル
- ・Athlete Night Games in FUKUI2025 ・全国中学校陸上競技選手権
- ・全日本実業団選手権 U20日本陸上競技選手権 ・全日本マスタース
- ・国民スポーツ大会 ・U16/U18陸上競技大会 ・全日本競歩高畠
- ・東京レガシーハーフマラソン2025 ・神戸マラソン ・防府読売マラソン
- ・福岡国際マラソン2025 ・全国中学校駅伝 ・全国高等学校駅伝
- ・全国都道府県対抗女子駅伝 ・全国都道府県対抗男子駅伝 ・大阪国際女子マラソン

2 報告事例紹介

全国各地の審判技術の向上やJ T O sの派遣による未然防止により、トラブル事例は減少してきましたが、まだまだトラブル事例が報告されています。これらの事例を生かしていただき、今後のトラブル防止につなげていただけたら幸いです。

○トラック競技にかかわるもの

・ビデオ観察装置

110mHで黄旗が上がらなかった妨害行為をビデオで発見し、当該競技者を失格とした。(CR18、TR17.1.2)

- ・陸連強化サイドから、「風が回っているので『吹き流し』を複数設置したい。」との要

望があり、競技規則に抵触するものでもなく、全競技者が視認できるものであることから問題ない旨を回答した。

- 男子400m決勝において、1着でフィニッシュした競技者が曲走路部分で2歩内側のラインを踏んだと観察員からの報告。決勝の1着の競技者の事象だけに、確実なエビデンスが必要とトラック審判長と確認。ビデオ室へ審判長と急行し、確認することとなった。コンペティションディレクターには、officialが遅れると連絡する。

以下事象について

- ①当該レースを撮影したSDカードを回収に回る。
- ②コンペティションディレクターより、「officialが出ているが良いか？」と連絡あり。FOPに残ったもう1人の審判長が監察員の報告どおり失格の裁定をしたと報告を受ける。
- ③1つ目のビデオを確認。内側の線を踏んだように見える部分を審判長と複数確認。三脚を使用していないため、手振れも有り、再生もコマ送りできないことから、ややはっきりしない映像であった。
- ④2つ目のビデオを確認。上記箇所からしばらく進んだ地点で比較的是っきりした映像を確認。失格は間違いないと判断した。
- ⑤抗議に対し審判長が対応（FOPで実際にジャッジをした審判長ではないもう1人の審判長）。（JTO自身は）監察員の報告どおり「複数回ラインを踏んだ」との説明を行ったと思っていたが実際は2つ目のビデオの「踏み越し」の説明を行った。
- ⑥リザルトの「2歩以上走った」と説明が異なるため、抗議者が説明を求める。審判長は失格理由を「内側ラインを踏み越した」に訂正。
- ⑦ラインを完全に踏み越していないと上訴。ジュリーは審判長裁定を支持。
（裁定時刻 21:15）
- ⑧その後も22時過ぎまで残って説明を求めたり、翌日以降も陸連事務局へ電話・メールの連絡が続いたりした。7月9日（水）、陸連事務局に当該チームから「伺い書」が届いたため、関係者で対応。陸連としての回答を事務局より14日（月）に送付した。
⇒ビデオ観察の体制、審判長の役割分担について（判断した審判長と説明した審判長が異なるという事象が起きていた）、課題が残った。
⇒抗議者の指摘に基づき審判長は失格事由を1回変更したが、抗議者の伺い書には2回変更されたリザルト（速報サイトのスクリーンショット）が添付されていた。（失格理由①T3(TR17.3)縁石または内側のラインの上、または内側を2歩以上走った→②T12(TR17.3.1)自分のレーンの内側を完全に1歩入った→③T12(TR17.2.3)曲走路において、内側のラインを踏み越した）しかも、条文番号と事由の内容が異なったところもあった。
- ⑨上記のことからも、失格にする場合はその対象となる事象を明らかにした上で根拠となる条文番号を明確にするという、基本的な手続きの大切さを改めて確認した

い。

- ・レースが確定していない状態で、「先ほどのレース、○レーン失格」とアナウンスがあった。

○フィールド競技にかかわるもの

- ・やり投げにおいて、やりの落下前に助走路を離脱したと見られる試技を有効試技としていた。
- ・IH円盤投げ予選中、タイマーやEDMが作動しなくなった。原因は、1つの電源ドラムに多くの配線が集中したことによるオーバーヒートであるとのこと。
- ・ハンマー投げで、ターンの途中でバランスを崩して転倒し体かサークルから出てしまった。無効試技の判定が出たが、後から確認したところ TR36.3 には無効試技には数えず、新試技が与えられるべきであったのではないかと思われる。

○ロード競技にかかわるもの

- ・競歩競技において、許可されたチーム関係者ではあるが、飲食物供給所のテーブルラインよりもやや前に出て渡そうとしている関係者がいたので注意を促した。
(TR54.10.5)
- ・折り返し地点が複数あるマラソン競技会において、先頭集団と後続がすれ違う際に、後ろに行けば行くほど、手持ちスマートフォンで先頭を撮影、中央分離帯や規制コーンを超えて撮影する者もあり、急な停止や振り返り等で周囲や後続ランナーの邪魔になっているように見え、中には転倒する者もいた。

3 JTOs 研修会

JTOsとしてのスキルアップを目指して、1月31日(土)にオンラインにて研修会を行いました。2026年度競技修改正案、広告展示物規程、スタートに関する研修を行った後、分科会を実施しました。そこでは今年度JTO活動の情報の共有などを中心に、他のJTOと共有すべき事項や色々な規則解釈について、活発な意見交換が行われました。

第 109 回日本陸上競技選手権大会 報告

公益財団法人 東京陸上競技協会

1. 大会についての概要

- 競技日程 2025 年 7 月 4 日（金）～6 日（日）
会場 国立競技場
世界選手権代表選考会として実施
最終日にサブイベントとして小学生 50m、デフ・パラ・マスターズの種目を実施した。
- 世界選手権標準記録突破
男子 3 種目（200m, 110mH, やり投）5 名
- 大会記録
男子 1500m, やり投 女子 800m, 5000m, ハンマー投
- 大会タイ記録
女子 100mH
- 日本記録（U20, U18 日本記録）
女子 800m 久保 凜（東大阪大敬愛高）1'59"52
- U18 日本タイ記録
男子 100m 清水 空跳（星稜高）10"19

2. 競技運営等について

- ・ 世界陸上のリハーサルも兼ねていたため、全国から主任クラス・オリンピックを経験していないNARに委嘱し、その方々に加え東京陸協の審判員という編成で行った。リハーサルを兼ねながら東京陸協の運営方法で進めていくという変則的な運営となった。それに伴い人員の不足などを感じる場面があった。より多くの補助員の動員も望まれたがJTOの指導の下運営を進めることができた。
- ・ 事前の準備等については、審判要領を作成し周知した。競技日程や投てき用具リストの作成については、日本陸連事務局・東京陸協と連携を図った。
- ・ サブトラックがないため、午前中～競技開始までメインスタジアムを開放し、暑熱対策で室内練習場に空調を効かせ開放した。時間によってレイアウトを変え各種目のウォーミングアップに対応した。ハードルのインターバルの位置出しを行った。
- ・ 暑熱対策のため、フィールド時間の大幅な変更があった。前日に判断し決定していたが、それに伴う競技役員への配慮等も課題となった。
- ・ 3000mSCについて、内水濠のため1周目を400mトラックで走り、通過後内水濠への縁石への入れ替え、3・4台目の移動式障害物の設置を行った。高さ変更の時には確実に固定するように指示をし、徹底した。水濠に向かう直線と曲走路の境にコーンを置いた。水濠の水が減っていくので、競技中水を注水した。ラップ旗は監

察が担当した。

- ・ 投てき用具リストに複数ないもの（日本陸上競技連盟検定品に限る）は、持ち込みを認めた。男子やり 9、女子やり 11、男子円盤 6、女子円盤 1、男子ハンマー 3 の持ち込みがあった。
- ・ 「クリーン FOP」を目指して、FOP のケーブルを全天候の端材等を被せることを行った。競技役員の配置にも気を配ったが、フィニッシュエリアでの報道・メディアの動きが気になる場面があり、今後の検討事項になった。
- ・ 女子 100mH 決勝において、写真判定のミスにより着順を取り違えて大型スクリーンに表示される事態があり関係の方にはご迷惑をおかけした。再発防止を徹底したい。

3. 抗議・上訴について

- ・ 抗議は 4 件うち 1 件上訴

〔上訴案件〕

男子 400m 決勝において、競技規則 T R 17.2.3 により大会当日失格と裁定された選手の失格が、大会終了後 Jury による再審議の結果、取り消され競技結果の訂正が行われた。

《審判長及び Jury による再審議の理由、経緯については、日本陸上競技連盟公式サイト【ニュース 2025.08.25 (月)】「第 109 回日本選手権大会・男子 4 0 0 m 決勝の競技結果の訂正について」を参照願います。》

令和8年1月6日

第109回日本陸上競技選手権大会・混成競技
第41回U20日本陸上競技選手権大会・混成競技
第109回日本陸上競技選手権大会・リレー競技
U16 4×100mリレー大会 報告

(一財)岐阜陸上競技協会

1 大会の狙い

- ア) トップアスリートの高い競技力を県民に紹介
- イ) 日本選手権混成競技(キング・クイーン誕生)にふさわしい大会の雰囲気づくり
- ウ) トップアスリートの競技力と観衆(応援)との一体感づくり
- エ) トップアスリートと県内ジュニア選手との交流・交歓
- オ) 競技運営力 審判技量の向上を図る

2 大会の方針

ア) テーマ:「アスリートのアイデアを取り入れた新たな競技会・イベント、アスリート中心の大会を目指して」

イ) テーマの具現化のために

視点1「アスリートコラボレーター」の参加…昨年に引き続き、中村明彦氏(所属スズキ)を「アスリートコラボレーター」として迎え、さらなる競技運営・広報活動の充実に協力を依頼する

視点2 ルールにのっとりながらできうる限り、選手のパフォーマンス発揮のための意見、アイデアを競技運営に取り入れ大会の雰囲気作りに努める

視点3 陸上および混成競技普及のために地元小・中学生を対象とした事業を実施する

視点4 昨年度実施した実績をもとにより充実した大会となるよう計画し取り組む

ウ) 事業

◎アスリート対策

- ・高温が予想される気候と多数の競技者(リレー競技)対策としてサンサンデッキ下駐車場を選手控え場所として確保した(岐阜市消防局の協力)
- ・各種目優勝選手の表彰並びにインタビューの実施
- ・2種目目以降総合成績1位選手専用のビブス着用
- ・混成競技選手控室の整備(電子レンジ・湯沸かしポットの設置など)
- ・800m 1500mトラック周囲(限定区域内)での応援を実施
- ・選手の人権擁護(盗撮防止・所轄警察官による巡回指導の実施)

◎陸上競技、混成競技の普及

- ・小学校、中学校とトップアスリート交流事業
(岐阜市内・近郊の小中各2校への訪問指導)
- ※トップアスリート 中村明彦氏(スズキ)、大学生(アシスタント)
- ・キッズイベント、周辺の利用計画で、興味付けや交流を図る

- ・スタジアムツアーの実施 ※対象：小学生
(競技開始直前の練習場面の見学と競技運営のバックヤード(情報室、写真判定室)など競技役員の活動場所の見学)
- ・ボランティア活動 ※対象 小学生・中学生(選手へのドリンクサービス他)

◎大会広報活動

- ・岐阜市内小学校・中学校(69校)に大会ポスター、大会案内リーフレットの配布
- ・新聞社2社(取材)

3 実施事業内容の報告

ア) 日本選手権大会・混成競技 ・U20 混成競技大会 参加選手数

- ・男子十種 24名 女子七種 24名
- ・U20 男子十種 15名 U20 女子七種 15名

イ) 日本選手権大会・リレー競技 参加チーム数

- ・男子 4×100m・4×400mリレー 各27チーム
- ・女子 4×100m・4×400mリレー 各27チーム

ウ) 日本選手権大会・リレー競技・U16 4×100mリレー 参加チーム数

- ・男子リレー 40チーム ・女子リレー 37チーム

エ) 普及事業参加者数

- ・小学生交流教室 6月11日(水) 三里小学校、 6月20日(金) 本田小学校
- ・中学生交流事業 6月18日(水) 午前：東長良中学校、 午後：境川中学校
- ・スタジアムツアー(コンバインド体感会)・ボランティア活動(ドリンクサービス)
暑熱対策のために競技日程が急遽変更になりやむなく中止した
- ・キッズイベント：芝生広場に設置
天候に恵まれ多くを子供たちがチャレンジしていた。

オ) その他

- ・キッチンカー6台配置(対象：大会関係者・観衆) 暑さ対策の一環としても活用。
好評であった

4 総 評

ア) 全体

- ① 今大会は選手権大会のリレー競技とU16 4×100mリレーが加わったため、参加人数が大幅に増えたことと時期的に暑さを考慮した控え場所の確保をすることが課題であったが、岐阜市消防局の寛大なる判断のもと、サンサンデッキ下駐車場を選手控え場所として確保することができた。
- ② 大会期間中の暑さが、暑さ指数WBGTが31℃を超える可能性が高いと判断され、事前に競技日程の変更が行われ11:30~14:00の間で競技を中断することが決定された、しかし直前になり、対応が不十分ではないかと中断時間を11:30~15:00に延長することが決定された、現状の競技開催条件では暑熱対策を実施することで競技者をはじめ競

技役員・競技補助員に多大な負担を強いることになってしまっている。今までの経験から何とか無事に終わることができたが、次年度以降は、午前午後セッションの競技会の運営になれることや、効率的な競技役員・競技補助員の配置・役割分担を計画する必要がある。もちろん、競技会開催条件の実情に応じた暑さ対策を計画することは必然である。

③競技会内容としては 2 日間にわたり変更された競技時間に沿って大きく影響されることなく進行できた。会場来訪者も 2 日間とも多くの方々が来場され、盛り上がった大会となった。特に、アスリートコラボレーターの存在が選手、観衆・応援者、競技役員の連帯感を高め円滑な展開に効果大であった。

④事前事業はほぼ計画通りに達成できた。

イ) アスリート対策

①アスリート中心をキーワードに選手の競技環境の整備に努めた。

昨年と同様に選手控室を雨天練習所横の更衣室を利用。控室に近接した所にトレーナールームの配置。電子レンジ・湯沸かしポットなど選手の希望で設置した。

②9 種目表彰を実施：各種目のトップ得点選手に表彰とインタビューを実施。選手全体のモチベーションの維持・向上を図った。

③要望に応じて、大会 2 日間にわたり第一種目、走高跳、棒高跳、ハードル、ダッシュなどの warming-up 場所を確保するために、競技中であってもメイン競技場のトラックを時間で利用できるようにした。

ウ) 陸上競技 混成競技の普及

①小学校・中学校との交流陸上教室に参加した児童・生徒は、中村アスリートコラボレーターの巧みなトレーニング指導を受け、競技仕様の用器具に触るなどして、楽しい体験することができ好評であった。

②チャレンジキッズのコーナーは、

○ハードル体験・測定

○走高跳チャレンジ

○20m 走測定

○投測定

○ターゲットスロー

の場所を設置して多くの参加者があり盛況であった。陸上競技の普及活動として十分な成果であった。

③小中学生を対象とした競技会におけるボランティア活動、スタジアムツアーは競技日程の変更により中止した。

エ) その他

①混成競技の選手たちにとって、リレー競技のにぎやかな雰囲気はどのように影響するか不安もあったが、選手たちからは競技場の雰囲気に活気が感じられ競技に意欲が沸いたとのことであった。競技場の雰囲気つくりのために、小・中学年齢期の子供たちを巻き込んだ競技会つくりの実践が重要である。

②混成競技の醍醐味は各種目に全力を出し切ることですが、高さを競う種目（走り高跳び、棒高跳び）は失敗しない限り競技を続けることができます。個人差も大きく時間を費やす種目となっています。競技運営上大きな課題です。競技役員からも敬遠される要素となっています。

そこで提案ですが、高さへの挑戦する種目は、試技数を一定化する、または失敗試技数の上限を決め数に達したら試技をやめるなどのルールに改修して、全体の競技時間の短縮、円滑化を図ることが必要ではないかと思います。109回大会では女子の走り高跳びで粘って自己新を出しましたが、次の種目で熱中症になってしまい競技を中断するという事態も出ていました。個人の暑熱対策が不十分といえればそれまでですが、暑いコンディションの中ではチャレンジし続ける選手も、次の種目の開始を待つ選手にとっても無制限に競技が続けられることはよい影響を出さないのではないのでしょうか。WAのルールといえればそれまでですが。

最後に、昨年に引き続き日本陸上競技選手権大会・混成競技、リレー競技を開催しましたが、暑熱対応で急遽の競技時間変更など今まで経験のなかった対応をすることになり緊張感がある大会となりました、運営にあたり日本陸上競技連盟スタッフ、アスリートコーラボレーター・中村明彦氏など多くの皆様にご協力ご支援をいただきなんとか大過なく競技運営にあたることができました。心より感謝申し上げます報告とさせていただきます。

令和 7 年度全国高等学校総合体育大会陸上競技大会
秩父宮賜杯 第 77 回全国高等学校陸上競技対校選手権大会 報告書

一般財団法人 広島陸上競技協会

- 1 期 日 2025 年 7 月 25 日（金）～29 日（火）
- 2 場 所 広島広域公園陸上競技場（広島市安佐南区）
- 3 実施種目 【男子】 21 種目【女子】 20 種目
- 4 報告事項

(1) 競技運営上の発生事象

① リレーにおける事象

- ・内側ラインを 2 歩以上踏み、失格になる事例が複数あった。
抗議についてはビデオ確認をしてもらった。
- ・オーバーゾーンについても監察員からの報告後、ビデオで確認し失格とした。

② 砂場の痕跡への質問もビデオにより確認し対応した。

(2) 大会運営上の対処

① 競技日程の見直し

前年度より競技日程の見直し（長距離種目の時間変更や、400m の分散化等）を進め、令和 7 年度競技日程を準備してきた。しかしながら「令和 7 年度全国高等学校総合体育大会陸上競技大会暑熱対策チェックリスト」に基づき、日本陸上競技連盟、全国高等学校体育連盟陸上競技専門部、広島陸上競技協会等と連携を図り、令和 7 年 7 月 22 日（火）に競技日程および競技方法の変更を発表し、7 月 24 日（木）の監督会議での意見・要望も取り入れ、最終競技日程を確定した。

② 役員・医療体制等

【役員体制】・競技役員：698 名（C 級審判 116 名含む）

競技役員の暑熱対策、拘束時間の観点から交代制を導入した。

競技日程の変更などの理由により、時間的に人員不足や道具・物品の不足等が実際の現場では反省としてあがった。

・審判長複数制

日本陸連のアドバイス・助言により複数審判長制の配置とした。

審判長 9 名（スタート 2 名、トラック 2 名、招集所 2 名、跳躍、投てき、混成各 1 名）

日本陸連 JTO の増員も大いに助かった。

・教職員の公務参加の決定が早く、審判編成も早めに対応することができた。また、中国・四国地区からの応援参加により、地域における審判技能の向上に対して効果があった。

【補助員体制】・競技補助員：477 名

高校生の大会を支えてくれた。C 級審判員との協力体制を築いた。

【公式練習日の医療体制】

（当初計画）・トレーナー：5 名

（実際の体制）医師 2 名、看護師 2 名、トレーナー 8 名

【大会期間中の医療体制】

（当初計画）・医師：2 名 ・救急救命士：2 名 ・看護師：2 名 ・トレーナー：10 名

（実際の体制）・医師：3～4 名 ・救急救命士：2～3 名 ・看護師：4～7 名

・トレーナー：12～20 名

多くのスタッフの協力により、メイン競技場のみならず練習会場まで医療体制が行き届いた。

【暑熱対策の具体的取組】

・医務室に男女各 1 台、計 2 台のアイスバスを設置（リース）

当初は稼働率が低かったが、日本陸連の助言を受け、医療チームと連携することで稼働率が向上した。

・ゴール付近に簡易アイスバス（ビニールプール）2 台を設置

使用状況を踏まえミックスゾーン横へ移設した結果、女子選手の利用も増加した。

<2025 年度全国競技運営責任者会議資料>

- ・氷水入りバケツを用いた散水対応を実施
本人の許可を得て頭部への散水も行い、より高い冷却効果が得られた。
 - ・大塚製薬によるブース設置
飲料水および氷の配付を行った。
 - ・その際、氷の確保を重点的に行った。製氷会社と連携し、板氷・砕氷を十分に確保した。
また、冷凍庫を5台確保し、氷をタイムリーに補給できる体制を整えた。
- 【選手控場所の充実】
- ・競技場サイドスタンド・バックスタンド下→日陰が多く、風通しも良好であった。
 - ・第1・第2球技場諸室および廊下開放→空調が効いており快適であった。
 - ・第1球技場芝生スタンド→ウォーミングアップエリアに近く、効率的であった。
 - ・常設テントエリア
→第2球技場、補助競技場、第1球技場間に多数設置し、ミスト扇風機や冷風機を配置した。

③ C級審判員の活動報告

広島大会においては、高校生によるC級審判員制度が発足してから、その活用を目指し、また広島インターハイでの活躍を期待し、養成を続けてきた。本大会では、C級審判員が各現場において積極的かつ的確な役割を果たし、その活躍が大会運営の質の向上に大きく寄与した。

【C級審判員の主な配置および担当業務】

- ・トラック競技（出発、周回記録）
 - ・フィールド競技（試技計測補助、記録確認）
 - ・競技全般（風力計測、混成競技補助）
 - ・競技区域外（記録情報処理、大型映像、TIC、競技者係、ウォームアップ場、会場管理）
- などの業務に配置され、上位資格審判員の指示のもと、主体的に業務を遂行した。

【具体的な活動内容】

フィールド競技では計測補助や記録確認を丁寧に行い、測定誤差や記録トラブルの防止に努めた。また、器具点検や競技エリアの安全確認を自主的に行う姿勢が見られ、安全な競技環境の確保に寄与した。

指示待ちに終始することなく、状況を判断して上位審判員に報告・提案を行うなど、C級審判員として期待される以上の主体的な行動が多く確認された。加えて、他の審判員や大会スタッフとの円滑な連携により、チームとしての運営力向上に貢献した。

今後の全国大会運営においても大いに期待される。

④ まとめ（反省と課題）

本年度の大会において、熱中症（疑い）による救護利用者は19名（選手12名、監督1名、役員1名、補助員1名、観客等4名）であり、そのうち3名が救急搬送となった「熱中症患者数ゼロ」を目標に準備を進めてきただけに、手放しで評価できる結果ではない。一方で、重篤な事案が発生しなかったことは不幸中の幸いであった。

大会期間中においても、日本陸連から散水の重要性について助言を受け、全国高体連関係者と連携して実施した。その結果、競技日程や競技方法の変更、練習会場の閉鎖といった判断を適切に行うことができた。

また、日本選手権や日本選手権混成大会等における取組事例や反省点についても情報提供を受け、大会準備に活かすことができた。競技日程や方法変更時には、広島陸上競技協会と一体となり、全国委員長会議および監督会議に臨むことができた。

さらに、日本陸連科学委員会を中心とした関係者から、科学的根拠に基づく助言と継続的な支援を受け、大会前から大会期間中に至るまで、自信をもって対応することができた。

一方で、暑熱対策チェックリストに明記していたとはいえ、大会直前に競技日程や方法を変更したことにより、選手・監督をはじめ多くの関係者に混乱を与えたが「命を守る」「安心・安全な大会運営」を最優先に判断したことについて理解を求めたい。

2026 年 1 月 23 日

(一社) 沖縄陸上競技協会 中体連担当 阿利 義一

(実行委員会 陸上競技専門委員長)

1, 大会名

第 52 回全日本中学校陸上競技選手権大会

2, 主な内容

(1) 大会前の準備について

- 中央連絡会議では、直接顔を合わせて会議を行うことで、確認事項や疑問点を確認でき、その後の連携を円滑に行うことに繋がったので良かった。また、行政や沖縄陸上競技協会がオンラインで参加できる形態であったのが良かった。
- 予算計画の中で会場費（テント設営、熱中症対策関係機材、競技運営機材、その他）物価高騰の影響から費用が心配されたが、各業者のご理解のもと当初予算より低価格で協力していただいた。
- 当初、競技運営機材として LED 電光掲示板を借用し使用する予定をしていたが、輸送費や物価高騰等による大幅な予算増となったため使用せず競技を運営した。そのために今年度は協会主催大会を含め競技場既存の機材でシミュレーション、近隣競技場や市町村より借用し大会運営を行った。
- 当初より懸念されていた駐車場の確保と宿泊施設から競技場までの移動手段に問題があった。そのためシャトルバスを最大限活用できるように旅行者と綿密な打ち合わせを行い対応した。直前の競技日程の変更に伴い最終競技が遅くなったことで競技終了後、シャトルバスが利用できない問題が発生した。そのため最終バス後に予備のバスを配置してもらった。
- 当初計画の競技日程（案）のホームページ掲載後、熱中症対策のため競技日程の変更が必要となり競技日程変更（案）をアップした。変更に伴い種目の日にちの移動は行わなかったが、チームや関係者から航空便に関する苦情が多くあった。
- 日本陸連のエントリーシステムを使用し資格審査、番組編成を行った。スムーズな資格審査、番組編成を行うことができた半面、専門部と情報処理担当との確認不足や認識の違いで細かいミスがあり修正で大幅な時間を要した。
- 大会前日に主任会議を行い、日本陸連、JOT も参加していただき多くの内容を確認することができた。

(2) 大会期間中について（問題点とその解決方法等、今度の課題）

【日程等について】

- 福井全中で前日練習の A D 規制をなくし役員の負担軽減ができないか。が反省としてあげられていたため、前日練習の A D 規制はメイン競技場正面出入口のみとし、それ以外の A D 規制は実施しなかった。
- 1500m（予選）、3000m（予選）で各組人数を増やすことで組数を減らし、競技

日程の短縮を行った。スタート時の接触、転倒等心配されたが人数を増やしたことによるトラブルはなかったと思われる。

- 熱帯低気圧襲来により 1500mの予選、決勝が最終日（同日）となったことによる抗議があった。全種目実施、全選手が出場するための判断であることを説明し理解していただいた。
- 開閉会式や表彰は昨年同様、競技場内で行わない。対応として昨年度より県内中学生大会の表彰は全中方式で行ってきたため混乱はなくスムーズであった。
- 暑熱対策の為、日中の競技会運営を避け、朝夕の2部に分け競技会を行ったが、通常の大会より審判員の拘束時間が長くなり、疲労の蓄積が気になった。

【競技運営について】

- 熱帯低気圧襲来による3日目・4日目の急な競技日程変更により最新の競技日程を確認しなかった4選手が失格となった。
- 熱中症対策として沖縄県消防職員競技会ユース部（救急救命士21名）のボランティアで会場の巡回による見守り・注意喚気をしていただき救護体制の強化と安心・安全な運営ができた。
- 熱中症対策の取り組みとして科学委員会の方と連携しWBGTの状況や予測を含め対応した。救急車両の要請については最終日の男子1500m予選後の熱中症1名が搬送されたが、その後、回復した。
- 女子800m予選1組出発前のスタート練習を行わなかったことによる監督からの抗議があった。出発係が選手入場後、スタート練習を促さなかったため、8名とも練習を行わないままスタートした。上訴にはならなかったが2組目からは練習を促していることなど、経緯を説明した。

【その他】

- 無断動画配信が2件あったが、会場アナウンスで呼びかけたところ、すぐに解除された。
- 宿泊ホテルの食事が少ない等のクレームがあったが、旅行者からホテルに直接連絡を取り対応して頂いた。

3. 終わりに

本県にとって過去、国体、二度のインターハイが行われているが、全国規模の大会は過去7年間実施されていない。審判員の減少と高齢化等の不安を抱えながらの運営となりましたが、様々な方のご協力をいただくことで、無事終えることができました。開催にあたり尽力いただいた全ての方に感謝申し上げます。離島である沖縄においては、全国規模のハイレベルな大会を直接目にする機会は貴重であり、陸上競技を志す中学生にとって大きな刺激と学びの場になったことと思います。

大会費用、熱中症を含む安全対策、働き方、部活動地域展開など、課題は山積してありますが令和9年度から実施される全中大会の規模縮小をめざした運営と次年度山口県の開催参考の一助になればと思います。

JOCジュニアオリンピックカップ
第 19 回 U18/第 56 回 U16 陸上競技大会 報告書

(一財) 三重陸上競技協会
競技委員長 藤原康喬

1.期 日 2025 年 10 月 17 日(金)~10 月 19 日(日)

2.場 所 三重交通 G スポーツの杜伊勢陸上競技場

3.種 目

U16 男子(5 種目) 100m、走高跳、棒高跳、走幅跳、砲丸投

U16 女子(5 種目) 100m、走高跳、棒高跳、走幅跳、砲丸投

U16 男子都道府県代表枠(6 種目) 150m、1000m、110mH、三段跳、円盤投、ジャベリックスロー

U16 女子都道府県代表枠(6 種目) 150m、1000m、100mH、三段跳、円盤投、ジャベリックスロー

U18 男子(15 種目) 100m、300m、800m、3000m、110mH、300mH、3000mW、走高跳、棒高跳
走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投

U18 女子(15 種目) 100m、300m、800m、1500m、100mH、3000mW、走高跳、棒高跳、走幅跳
三段跳、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投

4.大会概要

今年度は、三重県3ヶ年開催の2年目にあたる年であり、開催に向けて日本陸連や関係機関と連絡を取りながら、大会開催までの準備を進めた。今大会では、U18 男子5種目・女子4種目、U16 男子5種目、女子2種目の大会新・大会タイ記録が記録されました。U18 男子300mHでは、日本記録が誕生いたしました。

5.競技運営等について

○トラック

- ① フライングによる失格は、U18 男子1件、U16 男子1件の合計2件であった。
- ② U18 女子100mH 予選5組で5レーンの選手が号砲前に動き止まり切れずスターティングブロックから離れる事象があった。目視によりあきらかに不正スタートと判断できた。SIS の波形を確認したところ、5レーンの選手は動いているが不正スタートと判定されるまで大きな波形は出ていなかったが、7レーンの選手が5レーンの選手につられたかたちで、リアクションタイムが0.051秒と表示されていた。スタートチームでの協議の結果、Aゾーンで行われた円盤投の音に5レーンの選手が反応したと判断し、グリーンカードを提示し、スタートやり直しとなった。
- ③ U18 女子100mB 決勝で9レーンの選手が号砲前に動いた。スタートチームで競技し、スタート前方のピットで走幅跳の練習をしていた選手の影響でスタートを切ったと判断し、グリーンカードを提示し、スタートのやり直しとなった。

- ④ U16 男子 110mH6 組で 5 レーンの選手がハードルを倒してしまった。ビデオで確認したところ、ハードルを越えていなかったもので、失格と判定した。その際、隣のハードルが下がっていることが確認できたが、レースに影響なかったと判断し、5 レーンの選手の失格のみと判定した。

○フィールド

- ① U16 女子棒高跳は、風が競技開始時点で 4m 吹いていた。ポールを押し戻すが風でバーの方向に戻り、バーを倒す事例が数回あり、監督やコーチからポールがバーを倒して有効試技と無効試技があるのはなぜかと抗議が寄せられたが、「ポールが風の影響で押し戻されているかどうかを主審が判定している」との回答をした。上訴はなし。
- ② U18 女子棒高跳は、棒高跳開始前に風が逆になるとの予報を加味して、ピットは変更したため、競技開始が遅れた。予定より約 2 時間遅れて終了した。
- ③ U16 男子棒高跳は、雨天での競技会実施となった。開始前、コーチから「雨でぬれるので、ポールのテーピングをコーチエリアで実施したい」と申し出があったが、競技時間や公平性・平等性を配慮し選手自身に行ってもらったこととした。
- ④ 今大会の投てき競技は、昨年と同様にストップコーンを使用せず、すべて主審の旗による試技開始の合図を行った。ケージ種目はスピーディに進行するため、次投てき者をサークル脇まで促す形で開始合図を行い、タイトなスケジュールでも運営できた。
- ⑤ U18 男子円盤投の競技開始 20 分経過した試技 2 回目途中で、LED 記録表示盤に送れず表示できなくなった。光波距離計測器での計測には問題なかったので、競技は進行したその際トップ 8 表示盤も記録が更新されないため一時非表示となったが、トップ 8 表示盤はすぐ復旧した。しかし、LED 記録表示盤はなかなか復旧しなかったため、コーチや観客にわかるよう手動式距離表示盤を用意し対応した。イレギュラーな事象にも速やかに対応できた。

7.終わりに

昨年度の大会初日、投擲種目で競技進行が遅れた事では、選手・指導者をはじめ皆様にご迷惑をおかけ致しましたが、今年度は競技日程と時間の反省を活かして改善できたのではないかと考えております。ただ、U18 女子棒高跳では風の関係でピット変更により競技終了時間が予定よりも大幅に遅れました。仕方がない部分もありますが、このようなケースでも限りなく予定時間に近づけられるように運営して参りたいと思います。その他の部分では、時間通り進めた中で、大きなトラブルなく各区部署が臨機応変に対応しながら、スムーズな競技運営できたのではないかと考えております。

来年度は、3 年目の集大成の競技運営となります。日本陸連や関係機関としっかりと連絡を取り合いながら、これまでの反省をしっかりと活かして、良い競技運営をして参りたいと思います。

第 41 回 U20日本陸上競技選手権大会 報告書

(一財) 静岡陸上競技協会
競技委員長 堀之内 大

1. 期 日 2025 年 10 月 18 日(土)～10 月 19 日(日)
2. 場 所 草薙総合運動場陸上競技場
3. 種 目 男子・女子(各18種目)
 - ・ 100m、200m、400m、800m、1500m、3000m、5000m
 - ・ 110mH、400mH、3000mSC
 - ・ 走高跳、棒高跳、走幅跳、三段跳
 - ・ 砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投

4. 大会概要

U20単独開催の初年度にあたり、開催に向けて日本陸連や関係機関と連絡を取りながら大会開催までの準備を進めた。大会では、男子ハンマー投で大会記録・U20日本記録、女子3000mSCで大会記録(2名)・U18日本記録が更新された。

大会2日目は、草薙競技場特有のバックストレート使用の200mを実施でき、本来向かい風の中での競技を追い風で実施でき選手にとって良い条件となった。来年度も草薙での実施が決まっている。

5. 競技運営等について

○トラック

- ・ フライングによる失格は、男子110mHの1件であった。
- ・ 練習時の混雑を避け、選手によりよい準備をしてもらうためにトラックの練習時間やハードルのレーン設定等細かな計画を立てた。限られた時間と設備の中でさらなる改善を行い、練習環境を整えていきたい。
- ・ 2日目の空き時間にサブイベントを実施した。中高生の100m30組(240人)を無料で募った。希望者が多く最終的に抽選で参加者を決定した。選手はU20と同じ場所で同じ雰囲気味わうという貴重な体験ができて大変喜んでいた。

○フィールド

- ・ 選手紹介の時間がトラック競技と重なり、スタート時間がずれることがあった。途中から改善された。
- ・ 男子棒高跳 残り1名(優勝決定)で、大会記録挑戦であり、試技時間5分+1分の助言をJTOよりいただいた。
- ・ 女子三段跳 風が2Rあたりから逆風となり、トップ8確定からピット変更。ピット変更と練習跳躍などスムーズに実施できた。

○その他

- ・毎年G P 静岡国際を運営しているが、毎年のルール変更や最新の競技会運営に理解不足でJ T Oより多くの助言をいただいた。
- ・日本記録誕生の際の手続きや整えるべき書面についても慣れていない処理で手間取ってしまった。
- ・ゼロコントロールテスト実施後に、結果用紙にJ T Oがサインをする必要があるのに、すみやかに用紙の印刷出力をすることができなかった。
- ・これまでの競技会ではJTOが立ち会ったり、サインをする機会はなかったため、そのような段取りができていない。今後はしっかり準備する。
- ・待機場所（ベンチ）については、参加者数にたいしてスペースが広がったため、混乱はなかった。ただし、雨天時には対策が必要であると思われる。
- ・駐車場が少ないことが懸案であったが、少し離れた駐車場を借り、参加者にも周知され協力が得られたことで問題なく終了できた。

6. 抗議（質問）等について

- ・男子110mHで、不正スタートにより失格となったことに対して抗議があった。

【内容】

「スターター及びリコーラーからのピストルでリコールがなかった状況（目視では不正スタートと判断しなかった）にもかかわらず、SISによるリコールだけでなぜ不正スタートになるのか。目視の判断はどのように扱われるのか。その他の競技会ではどうされているのか。」という抗議であった。

『ビデオが設置されず、ビデオ監察審判長も配置されていない競技会では、SISでの判定が基準になり、その波形を見て判定した』と説明。上訴はなし。

7. 終わりに

草薙で久しぶりの全国規模の大会を開催することで不安もありましたが、日本陸連と連携を取りながら無事実施することができました。本当にありがとうございました。

終了後は、審判員が多くの学びと貴重な経験をすることができ、達成感のある大会となりました。大きなトラブルもなく各部署で臨機応変に対応しながら、競技運営ができたのではないかと考えています。来年度は、2年目の競技運営となります。日本陸連や関係機関としっかりと連絡を取り合いながら、1年目の反省をしっかりと活かして、さらに良い競技会にしていきたいと思えます。

わた SHIGA 輝く国スポ 第 79 回国民スポーツ大会 報告書

(一財) 滋賀陸上競技協会
競技委員長 藤田 武志

1. 開催期日

令和 7 年 10 月 3 日 (金) ~ 7 日 (火)

2. 会 場

平和堂 HATO スタジアム (彦根総合スポーツ公園陸上競技場)

3. 実施種目

男子 29 種目・女子 26 種目・男女混合 1 種目 計 56 種目

4. 新記録

U20 日本新記録: 4

U18 日本新記録: 6

大会新記録: 29

大会タイ記録: 5

日本高校新記録: 1

(詳細: <https://www.jaaf.or.jp/files/competition/document/1928-7.pdf>)

5. 抗議・上訴事例等

(1) 少年男子 B 100m 予選 3 組

スタート時、隣のレーンの選手がバランスを崩して本選手のレーンに入ってきたため、レーン侵害を受けたのではないかとの抗議があった。

ビデオ映像を確認した結果、レーン侵害には該当しないと判断し、抗議を棄却した。

(2) 少年女子 A 100m 準決勝 2 組

スタート時、「セット」の号令後に静止する前に号砲が鳴り、ピストル音も不明瞭であったため、スタート音と認識できず出遅れたとの申し出があった。

該当選手の両隣の選手はいずれも通常どおりスタートしていたことから、特に問題はないと判断し、抗議を棄却した。

(3) 成年少年共通女子 4×100m リレー準決勝 1 組

2 着チームの第 1 走者がインレーンを踏み越えて走行したとして、順位の繰り上げを求める抗議があった。

抗議者から提出されたビデオ映像をもとに再確認を行った結果、当該チームによるレーン侵害が認められたため、審判長が失格の裁定を行った。

その後、決勝のスタートリスト発表後に当該チームから失格を不服とする上訴があったが、 Jury は審判長の裁定を支持した。

(4) 成年少年男女混合 4×400m リレー予選1組

練習会場でウォーミングアップ中、当該チームの選手が他の選手と衝突し、走行不能となった。チームから救済の申し出があったが、ルール (TR24.12) に基づき「予選を走らない限り救済はできない」と回答した。

当該チームは「交代できる選手が時間的にいないこと」および「衝突が運営側の不手際によるものではないか」として再度救済を求めた。これに対し、ルール上選手変更は認められる旨を伝え、変更手続きを行うよう求めるとともに、衝突の原因について関係部署への聴き取り調査を実施した。

一連のやり取りの中で招集完了時刻を過ぎたため、当初は欠場扱いとしたが、当該チームより「完了時刻を過ぎたのは運営側対応の遅れによるもの」との抗議があった。

聴き取り調査の結果、衝突については双方に明確な過失はないと判断した。これを踏まえ、総務で協議した結果、予選欠場は当該チームの責任によるものではないと認め、特例として翌10月7日9時30分より、予選第5組として当該チーム単独でのレースを設定した。レーンは予選第1組と同一とした。

なお、決勝進出については、タイムによる決勝進出の第4位記録 (3分22秒78) 以内であれば、決勝を9チームで実施することとし、その場合、9番目のチームの対抗得点は0点とした。この決定については、各チームに対しオープンチャットで「当該チームの申し出により、総務の決定で特別予選を実施する」と通知するとともに、報道用サイトにも同内容を掲載した。

(5) 成年少年男女混合 4×400m リレー予選3組

第3走者がバトンを落とす事例が発生し、当該チームより「他チームとの接触が原因であるため救済してほしい」との抗議があった。審判長がビデオ映像を確認した結果、レースインシデントと判断し、裁定の変更は行わなかった。また、当該チームより「第3走者のバトン待機順序の呼び出しに誤りがあったのではないか」との抗議があった。関係する審判員への聴き取りおよびビデオ映像を確認した結果、呼び出しに誤りはなかったことが確認され、その旨を説明した。その後、「他チームが呼び出し順と異なる順番で待機していたため不利益を被った」と主訴を変更して上訴がなされたが、ジュリーは、ルールに照らすと当該チームも失格となり得る事案であるとして、審判長の裁定を支持した。

(6) 成年少年男女混合 4×400m リレー予選4組

第4走者がバトンを落とす事例が発生し、当該チームより以下の抗議があった。

A：他チームとの接触が原因でバトンを落とした。

B：バトンを拾う際、失速を余儀なくされ妨害を受けた。

C：バトンを拾う際、進路変更を余儀なくされ妨害を受けた。

いずれの抗議についても審判長は裁定の変更を行わなかった。全てのチームから上訴がなされたが、ジュリーは全ての上訴において審判長の裁定を支持した。

6. 競技運営の工夫

(1) 競技日程

各種目の紹介をどこに入れるか。フィールド競技の終わりの時間をどのタイミングにするかにこだわり、全ての種目の優勝者決定の瞬間に観客の注目が届くように設定した。また、地元滋賀県選手が出場する競技を、学校観戦が来やすい時間帯に設定し、会場が盛り上がるようにした。

(2) 成年女子走高跳

参加人数が 30 人と想定より多いエントリーがあり、国スポでは過去例があまりないと思われる、2ピットにわけての実施とした。日本陸連のハンドブック P381 記載の通り、試技順序と試技時間を設定し、競技結果も 2ピットに分けたものと、合体したものと、2つ同時に競技運営システムに入力した。

(3) 世界選手権東京大会から

大きな盛り上がりがあった大会からのレガシーとして、フィールド競技の停止告知機をコーンから彦根市のマスコットにしたり、会場が一体となるアナウンスの工夫を行ったりした。

(4) マイルリレーの呼び出し方法（裁定の検証性確保）

競技場設備の有線インカムを使用し、その音声出力をスターター用トランペットメガホンに入力することで、200m 地点に配置された審判員による通過順の読み上げを、選手に直接伝えるとともに、ビデオ監察映像にも音声として記録されるようにした。

〔構成〕

ベルトパックインカム → 埋設配線 → ベルトパックインカム → イヤホン出力 → 2.5mm モノラル-3.5mm モノラルケーブル → スターター用トランペットメガホン

7. 終わりに

会場となった平和堂 HATO スタジアムは 2023 年に竣工した競技場であり、国スポ開催が決定する以前は、情報処理システムや大型映像装置、インカム等の通信機器も十分に整備されておらず、全国規模大会の運営体制は確立されていない状況であった。そのため、滋賀陸協が全国大会を運営するにあたり、体制づくりそのものから取り組む必要があった。

2019 年に開催された本会議における報告資料では、福井県が国体開催に至るまでの経過が示されており、その内容が滋賀県の状況と極めて類似していたことから、まずは全国大会の現場に足を運び、実際の競技運営を学ぶことを重視した。準備段階から多大なるご助言・ご協力をいただいた日本陸連競技運営委員会の皆様、ならびに各都道府県陸協の皆様へ深く感謝いたします。

「滋賀国スポ（第 79 回国民スポーツ大会）」は、昭和 56 年（1981 年）の「びわこ国体」以来、実に 44 年ぶりの開催となった。長期間にわたり全国規模の大会開催がなかった中で、準備にあたっては先県への視察を重ね、計画的に大会運営体制の構築を進めた。

主会場である平和堂 HATO スタジアムは、新型コロナウイルスの影響により開場が 1 年延期され、加えて昨年度に予定されていたリハーサル大会は台風接近により中止となった。そのため、ミックスゾーンの運営や衣類運搬等、国スポ特有の運営項目について十分な事前検証が行えなかった点が懸念事項であった。

4 月以降は、審判長・主任・実行委員会を中心に月 1 回のオンラインミーティングを実施し、大会までの準備状況や課題の共有を図った。また、県内で開催された各競技会においても国スポ本番を意識した運営を行い、各部署の競技運営能力の向上に努めた。

大会期間中は、日本陸連（JT0）の皆様から運営面について高い評価をいただき、関係者一同、大きな自信をもって大会運営に臨むことができた。また、東京世界陸上の出場選手 40 名がエントリーしたこともあり、大会全体として非常に盛り上がりを見せた。各都道府県選手団や関係者からも「近年の国スポ（国体）の中でも最も盛り上がった大会であった」との評価をいただいたことは、大きな成果である。

今回の大会で得られた経験と課題を、2026 年度の全国高等学校総合体育大会および 2027 年度の全国中学校体育大会の運営に活かし、今後のさらなる発展につなげていきたい。